

土 淨

昭和十年五月廿三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
 昭和二十四年四月二十八日運輸省特別授承認第三五二號
 昭和三十一年五月一日發行

第二十二卷

第五號



五月號

卷頭言

愚息が中學の入試勉強をしていた頃、試みに日本地理を試問してみた。「宇都宮は」ときいたら、産業・人口・廣さその他よく知つてゐる。さすがはわが子なりと内心喜んで、さて、それなら宇都宮は東京のどつちの方にあつて、何時間ぐらいかかるのかとたづねてみたら、全然分らなかつた。さつきの喜びはぬか喜びに終つてしまつた。

近來、日本の教育は大變に進歩したようだが、何だか、一番大切なものが缺けているように感じられてならない。金ボタンの中學生になつても、ABC……が満足にいえぬ。どうも少しおかしい。もう少し、基礎的な、そして、それをもとにしてのびられるようなものが抜けてゐるのではないだろうか。

戦後ドイツでは、地理が盛んになつたという。日本で昔やつたような仕方では、地理がどしどし教えられてゐる。ドイツが、第二次大戦を引きおこしたのは、ヒットラー時代の Deutschland über Alles (ドイツは萬國にすぐれたり) という、盲目的優越心の結果であることに氣がついたからである。萬國をひろく眺望して、その大勢をわきまえていたならば、あんな間違ひはしなかつた。というわけで、一生懸命に地理の勉強をしているのである。

日本も、神國ではヨリゴリしたはずなのに、日本が世界の何處にあつて、どのくらい小さいかを忘れさせようとしている。これは一體誰がそうさせているのだろうか。(竹中)

目次 (列祖號)

吉田絃二郎先生を悼む……………佐藤賢順(1)

曇鸞大師……………藤堂恭俊(2)

鎮西上人……………眞野龍海(11)

近頃保育隨想……………内山憲尙(18)

ホノルル通信(3)……………松濤弘道(22)

善導大師……………宮林昭彦(6)

記主上人の生涯……………大野法道(14)

日曜學校の歩み……………山口謙次(20)

紹介……………(32)

巴御前と覺明(下)……………鶴田湛泉(24)・新興宗教讀本(八)……………竹中信常(27)

表紙……………結城天童

吉田絃二郎先生を悼む

佐藤賢順

四月二十日の朝、吉田絃二郎先生御危篤の電話をうけて、本誌関係者一同は大きな驚きに打たれ深い憂いに閉ざされた。翌二十一日朝、遂に先生は亡くなられた。哀悼の至り、痛惜の極み、いかなる言葉をもつてしても表わすことができない。

回顧すると先生と本誌との御縁は實に二十數年の昔に遡る。昭和十年、本誌創刊の直後、先生をお招きして法然上人についてのお話をうかがつた時からのことである。爾來、先生が本誌と鑽仰會の祖德鑽仰運動に對して示された御援助や御厚意は、終始變ることがなかつた。長い年月の間、先生の珠玉の隨筆が、本誌を飾つてきたが、これは全く先生が宗教運動に對する御熱情からの奉仕的執筆であつた。人の一生のうちで、二十年にも亘つて、一つの運動を援助するなどということは、全く有難く奇篤なことである。

先生は昭和十二年に奥さんを亡くされたが、それが佛縁を結ぶ機會となつて、本宗の上人方とも廣く交遊があつた。とりわけて古くは大島徹水老師、近くは池田立基老師とは親交があつた。そんな關係で、深く念佛信仰に徹しておられて、離れの佛間の、奥さんのお位牌の前で、念佛三昧を續けられたことも珍らしくなかつた。先生の文章から、清純な清水のように、純情と愛が湧き出ているのは、深い念佛信仰の故である。暑い夏の日、長い道中を旅してきた旅人が、木立の蔭に湧き出る清水を見出して、渴いた咽喉をうるおすように、先生の文章に接する者は、人生の憩いと慈しみを見出してゐる。東大の中村元博士は本誌の先生の隨筆を讀んで、「現代において眞に佛教の信仰を身につけてゐる人」と讃えている。

二七日忌に當る五月四日、本郷講安寺に五重相傳會のため來錫中の、淨土宗管長神居琳應大僧正は相續人のなつ子さんを招いて、參衆の一同とともに一會の回向をなされ、かつ先生が長年、淨土宗のために盡された功績を謝せられた。

法名は「二絃院索譽暢發法音居士」と申す。願くは居士、蓮台に乗じて速かに淨土に超生し不退轉位に住せられんことを。

合掌 南無阿彌陀佛

曇鸞大師

— 信仰のはこび —



藤 堂 恭 俊

○ 曇鸞大師といふとなんだか遠い遙か彼方のお方のように思われがちである。なる程、年代的にいつて法然上人が常々師と仰がれた善導大師は曇鸞大師の孫弟子にあたるお方であるから、随分昔のお方であるわけである。しかし法然上人とか、善導大師といふと、なにか時間を超えて私たちに親しい、近いお方であるように感じられ

る。このような時間を超えた親近感が曇鸞大師に對して湧いてこないのは何故だろうか。そこには年代の古さにのみ歸することができないものがある。曇鸞大師が著わされた『往生淨土論註』というお書物は、理論的に大變むづかしいと言われている。そうした理論的な難解さが、近よりがたい、親しみにくいお方のように思い込ましてしまつたためでなかろうか。曇鸞大師は決して論理をもてあそばれたのではない。あれ程の鋭い論理によつてお念佛の信仰を裏付けなければ、淨土教を開顯することができなかつたのである。すべては曇鸞大師の内に燃える強い念佛の信仰がそうせしめたのである。私は曇鸞大師が『往生淨土論註』のなかにお示し下さつたお言葉を、常日頃心におさめて信仰の資としている。そうした意味で曇鸞大師は、お念佛を申すものにとつて、常に身近にあつてお示しを下さる親しいお方であるわけである。

○ 信心淳からず、あるがごとく、なきがごとし。信心一ならず、決定なし。信心相續せず、餘念をまじえる。

なんという耳の痛い、一句一句ぐいぐい胸の内にくい込んでくるお言葉であらうか。深くみづからの内に省みて懺悔の氣持ちで一杯である。佛前にぬかすき、文字通り形のごとく口に南無阿彌陀佛とみ名を稱える。その自分の心のおくそこれまで見抜かれたような、まつたくみにくいところをあからさまにされたような感じに包まれ、恥入つてしまふ次第である。

いつ拜讀してもびしびしとわが胸深くうち迫るものを感じずにはいられない。なんというきびしいお言葉であらうか。曇鸞大師に催された信仰の息吹きが、息づかいが、しかと感受される。なんという調子の高い、生命にみちたお言葉であらうか。

私はこのお言葉を強い手ごたえをもつて、しかと、わが身に、わが心に受けとるとともに、曇鸞大師がいかにもみづからの信仰の歩みに對し、するどい反省を投げかけ信仰のふかまりについて心をくだき、工夫を凝し、より確實なたしかさを求められたお方であつたかを偲ばずにはいられない。

このきびしくわが胸打つお言葉は「常日頃お念佛を申しているのに、どうしたことが、いつこうたしかなくてごたえがない。これは一體どうしたことだろうか。」

という問いに對し、曇鸞大師が、お念佛が本當に申されているか、いないかということを判定するために

(1) 信仰の對象について、たしかなわきまえが出來上つてゐるか、いないか。

(2) 信仰のはこびが具合よく進められているか、いなか。

という兩つの規準をおだしになつた、その(2)の方に關するお示しである。

○

内なる心のうごきは外なる身體の上に動作となり、表情となつてあらわれるものである。この内と外とが相應するのが至極自然なりゆきであり、亦最も願わしいことでもある。とかく人はその生活にあつて、長い年月を費して内外不相應なるべきことを習い、身につけてしまふのである。ともかく、この内と外との關係は信仰の上でも大きな問題を投げかけているのである。

信心という内に燃える清淨な炎は、どうしても念佛行となつて外にあらわれずにはいられないものである。口にただ南無阿彌陀佛とみ名をお稱え申すということは、實のところ内に燃える信仰の炎、内部要求のあらわれに外ならない。お念佛にどうも身が入らない、進まない。というのは、そうした意味で内外要求と關聯さして充分反省すべきである。曇鸞大師がお示し下さつたお言葉には、内と外とがかみあわさつてゐるのである。よくよく心してこのお示しを味つてみたいと思う。

○

口に南無阿彌陀佛とみ名を稱えるにも、本當に心の奥底からお稱え申さずにはいられない、という内に燃えるものがそうせしめる場合と、ただお稱え申さねばならない、というようになにか強制された氣持が先立つてお稱え申す場合とがある。内に燃え上るものが乏しければ、おのづとおすがりし、おたのみ申し上げる迫力も薄く弱い。従つてみ名をお稱え申したり、申さなかつたりして、一向お念佛に身が入らないのである。「信心淳からず、あるがごとく、なきがごとし」と言われる所以である。しかしお稱え申さなければならぬ氣持が心のどこかに宿つてゐる間は、散發的ではあるがお念佛を申し、まつたくやめてしまふようなことはない。ただお念佛に身が入らないだけである。身が入らないままにお念佛を申すということは随分苦しいものである。彼岸から發するみ佛のはたらきかけに應じようとする迫力が湧いてこないから、まつたく砂をかむようなものである。そこには彼此の生命のふれあいがないから、苦しみのみ感ずる外ないのである。結局それは、内なる心のうごきと外なるすがた・はたらきとが一致しないという一點に歸結する。このような状態を祖師は「虚假のさわり」と呼んでいらる。

内と外とが一つになることこそ實に願わしいことである。どうもこの内と外とが一つになるのは容易なことではない。内部要求の薄弱の間はつい外見をてらい、いか

にも念佛者であるかのようによそおつてみるものである。外見をてらい・かざるということは素直でない證據である。「信心の淳さ」ということはただ信仰心の薄弱に對するだけでなく、素直であるということをも含んでゐる。外をかざりたてることなく、内なるものにいつわることなく、内に燃えあがるものを確立することが、なによりも先づ急務である。ただ内なる心にほだされるまに、素直に内外一つの状態となつてお念佛にはげむところに、信心の内に深く確立をみるであらう。その時こそ本當にみ佛のすべてをおさめとつて捨てない、攝取の願海にひたることが出来る。ひたるといふことは溺れることではない。み佛のみところをわが心とすることである。それはただみ佛のみところのままに、というまかせ切つた心の状態、私とか、自分の力とかいうような、こちら側のすべてを捨てきつて、み佛の大いなる懷のなかに抱かれた心もちである。彼此の生命がふれあつた極地である。

さらにこの「信心淳からず」といふことは信仰の持續と大いに關係をもつ。み佛におすがりし、おたより申し上げるといふ内なるものが薄弱であれば、ある程、信仰の持續は困難である。どうも次から次へと燃えうつつてゆく氣力がないのである。ただなにかの機會をえて燃えあがるようなことがあつても、常日頃はすつかり忘れ去られ、たち消えたかのようなものである。従つてお念佛も持續

するでもなく、思いだすままにしか口をついででてこないものである。ただその日、その日の営みに追れ、そのことにあれ、これと思いをめぐらすのみであつて、お念佛は中斷されてしまう。「信心相續せず、餘念をまじえる」というお示しは、このことを仰せになつてゐるのである。所謂心におすがりし、おたより申し上げるという緊張感がないから、ついお念佛に懈怠を催すことになる。内に燃える炎はいくら強く燃えあがつても、燃えつくすということはない。汲めども、汲みとれどもつきせぬ泉のごとく、内なる炎は漸次昂まり、日進月歩して無限にやまない。そこにはただお念佛の持續のみがある。

○

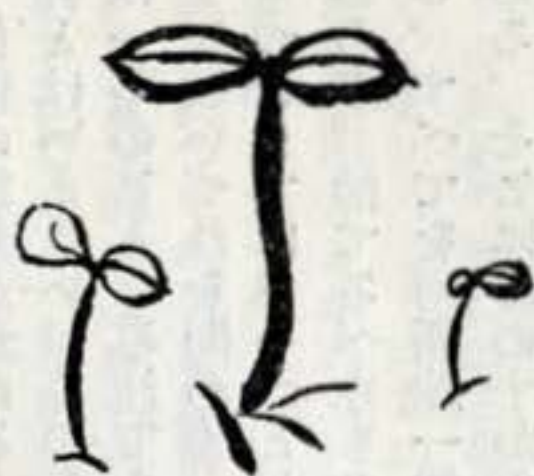
口にみ佛のみ名をお稱え申すということは、信仰の対象である阿彌陀一佛に自己のすべてをおまかせし、おすがり申し上げることである。このおすがりする氣持の薄弱な心には、信仰の対象が確立しない。願いごとによつて信仰の対象がかわるようなことでは、決して純粹な信仰とはいえない。心のみだれ易い人、氣どころの多い人は一つのことと專注できないものである。あれも、これも玉石いづれを問わす、なにもかもすべてにかかわりをもつようでは、一つとして成しとげることとはできないであらう。捨てるべきものは捨ててかからなければならぬ。すべてを阿彌陀一佛の念佛信仰によつて律すべきである。そこにおのずから玉石の見わけがつき、捨てるべきものはをしげもなく、なんのこたわりもなく捨てるこ

とができ、いよいよ純粹な念佛一行に歸結する。なにはさてをいて、信仰の対象をわが胸内に確立することが、先づもつて急務である。

おまかせする、おたより申し上げるということは、よほど相手に對するしつかりした信賴感、依憑感がなくては成立つものではない。なにごとによらず人の世の生活は、先づ疑つてみることから始る。しかし信仰にはそうした疑いは無用であり、これ程大きいさわりはないものである。任せきつて任せ甲斐のある確かなものが、私たちの信仰の対象である阿彌陀佛なのである。これ以上たしかなもの外にはないのである。すべてのものを一つとして漏らさず、おさめとつて捨てることのない攝取のみところに對して、確信がもてないということは、意識すると否とにかかわらず、心のどこかに疑いが宿つてゐる證據である。この疑いの心がある間はどうしても信仰の対象を阿彌陀一佛に決定することができないのである。かく信心のすえどころが決定しないから、お念佛の一行にのみとどまることができないのである。「信心一ならず、決定なし」というお示しはこのことを仰せになつてゐるのである。

○

信心と念佛行とは常に表裏してゐる。さらに信心の淳さ、信仰対象の決定、信心の相續という三つは、互に關係しあつて、信心を、念佛行を深めてゆく。心にしかとこの三句をおもいとどめて、信仰のはこびに萬全を期したいものである。(佛教文化研究所主任佛教大學助教授)



善導大師

宮 林 昭 彦

☆ ☆

善導大師、このことばは、浄土門の流れを汲むものは、幾たび仰ぎいかに強く心に刻みこんだことであろうか。否念佛の聲するかぎり永遠に叫び続けられるであろうし、偉大なる聖者の徳は限りなく讃仰されるであろう。法然上人が、「偏依善導一師」と云われて、その教義安心ともに大師によつて立教開宗せられたことを想うとき、わが國浄土門の開創に最も深い関係のあることは言を俟たない。

大師は隋の煬帝大業九年（六一三）に生誕せられた。わが推古天皇二十一年に當る。瑞應刪傳によると、「姓は朱泗州の人なり」とあり、泗州は現在の安徽省泗州府盱眙縣の北一里のところである。幼少にして出家し、後ち法華經や維摩經をはじめ深い佛教の學問を研究せられたという。傳えるところによると、時々浄土の變相を見た大師は、大いに感動を覚え、「この身を蓮臺に托して、この心を浄土に棲ませたいもの」と云われ、既に浄土往生を期するに至

つたという。歳二十歳の頃、大師は具足戒を受けられ、いよいよ嚴しい求道の生活に入られたらしい。後年大師が、「煩惱深うして底なく、生死の海ほとりなし、苦を度るの船未だ立せず、いかんぞ樂んで睡眠せん。勇猛に勤めて精進し、心を攝して常に禪におき給え」と

と説かれているこの一偈においても、既に煩悶苦悶の大師が偲ばれるのである。私たちが釋尊に對して嚴肅な中に憧憬の瞳を光らすのも、一に若き王子シッダルタが當面し體驗された「眞實に生きんとする悩み」においてであるように、大師の煩惱惡業に對する異常なる鋭感や、聖なるものへの高踏的な情操を育てあげられた様相を想像するとき眞實に生きんとする大師の、異常な嚴さをみるのである。大師の求道の友として、妙開律師という方がある。瑞應刪傳には「妙開律師と共に觀經を看て悲喜交々至り云く」と傳えている。大師と律師は經藏に引き籠り互に知徳を磨く道友として切磋したことであろう。偶々「觀無量壽經」

を貪り讀んだ大師は、驚くべき世界を見せつけられ思わす恭敬合掌し、覺えず經典を押し戴いたと傳えられている。そのとき、如來の慈光が大師の靈肉を透射したことであらう。

「余の行業を修するも、迂僻にして成じ難し。唯この觀門のみ定んで生死を超えん。」

私たちは、時間空間を超えて、靜寂な經藏のなか、幽かにゆらぐ薄光を浴びながら、觀經を貪り讀んだ二人の道友を想像しよう。經卷のページをひらくにつれてその各々の文字の底に輝く如來の大慈光に接觸したとき、自ら愚かしさ、醜くさを痛感するとともに、どんなにか奇異な魅惑のうちにふるえたことだろう。

私たちは、中國の淨土教の歴史において最も代表的な思想家として、廬山の慧遠と曇鸞と、そして道綽の三高僧を數えることができる。これの方々は大師の思想大系を組立てる最も重要な成素をなしているものであり、大師の生活史のページに三高僧の名を逸することはできない。しかし今は、大師の生涯に最も直接的な交渉を持つたと思われる道綽禪師について一瞥してみよう。道綽禪師はその晩年にわが大師の來訪を受けている。もとは「涅槃」の學匠で、かねて修禪に力めた人であつたが、石壁の玄中寺（山西省太原縣）で曇鸞大師の碑文を見て、忽ちに熱烈なる念佛行者となり、常に玄中寺に在つて、念佛を行じ觀經を講讀せられたという。安樂集には、「念佛三昧は一切三昧中の王なり」と説かれている。世の人この暗き心の中に眞理の燈をかがけて、無意義な生の巷にさまよう世の人々に、攝取不捨の教を垂れ念佛を鼓吹せられたのである。

大師が道綽禪師をはるばる石壁山の一角に訪れたとき、禪師は、若き大師を心から迎えた。石壁の一角、玄中寺の一室における二聖僧の對面はどんな敬虔な念に充ちたことであらう。殊に「觀經」を授けられた大師の胸中の歡びはいかばかりであつたらうか。時に貞觀十五年（六四一）、大師二十九歳、道綽は八十歳の高齡であつた。

その後、大師は禪師のもとで解行を勵み、三昧を發得せられたという。往生傳に、「念佛は實に往生を得るや否や。師、答えて曰く。各々の蓮華を辨じ行道すること七日にして萎まずば、即ち往生を得ん」と説かれている。件の人は告げられるままにそれを試みたが、案に違わず七日の後にも華は萎まず香り高く息づいていたという。このとき、件の人は合掌して大師を拜んだ。禪師もこのことを聞いて、大師の深詣を歎じられたという。

現代の私たちには、一寸理解し難い傳説的なことが大師の生涯には少なからず認められる。大師御一代の行蹟に關しては、既に法然上人が「類聚淨土五祖傳」の中に「唐高僧傳」以下六傳ををつらねて示されているが、その詳細については鮮明を缺くものが多々ある。しかし、それは夫々の作者が大師の偉大さを後世に傳えんがために焦慮してなせる業ではなからうか。そこには大師の徳を敬慕し讃仰する作者の善意を感じることができるとに角、大師に關する文獻の種々は、人間としての大師をそのまま描き出さず、所謂傳説の中に封じ込めようとしていることは事實である。傳説の大師は飽くまで美しくそして大きい。しかし、美しく大きい大師を傳えんとした傳記の作者は恐らく人間としての大師を正視することができないで各自の主觀に映

つた姿を描くより外はなかつたのだろう。文獻には數多くの問題があり謎があろう。しかし、この謎の中に三昧發得の行者としての善導大師がむしろ光り輝いている。

三昧を發得された大師は當時の文化の都長安（陝西省西安府）に移り念佛を行すると共に大いに民衆を教化した。續高僧傳には、

「既に京師に入りて廣くこの化を行じ、彌陀經を寫すと數萬卷、士女奉ずる者其數無量なり。時に光明寺に在りて說法す。」

と傳えている。又、瑞應刪傳には、「彌陀經を寫すこと十萬卷、淨土の變相を畫くこと三百鋪、所見の塔廟修葺せざることなし」とも傳えている。

大師の日常生活は、極めて如法峻嚴にして、戒法を奉持し、秋毫も犯すことがなかつた。目をあげて女人を見ず、洗浴以外には三衣を脱することなく、三十餘年一定の寢所ももたずして、ひたすら念佛せられ、大なる救いの道を勧められたという。今ここに大師の偉大なる感化を物語るエピソードをみてみよう。

長安に屠兒寶藏なるものがあつた。當時長安の都は大師の感化で念佛の聲は洋々として漲り、滿都の人々は肉食を斷つということになり、かれの如く肉を賣る商賣は一向に榮えないばかりでなく、段々さびれてしまつた。かれ達は大師を恨んだ。そして大師に對する憎惡の念は念佛の隆昌と比例して伸びていつた。ところが、或るときのこと遂に憎惡の念をもやし切つたかれ達は、刀を隠して大師の住房に躍り込んだ。そのとき大師は從容として迫らず、念佛を唱えながら靜かに西方を指されると、そこに極樂淨土の變

相が現出し、諄々と西方の要路を指示された。その時、寶藏は大師の德を慕つて回心發願し念佛の信仰者になつたという。

この事は、「佛祖統記」の中に傳えられているのであるが、この一文をみてもいかに大師の教が一般民衆に擴りつゝあつたかが窺うことができる。

この間、大師は、「觀無量壽經」の註疏が、その眞實の義を顯わしているものがなく、寧ろ誤解せられたものの多いのを歎き、自ら古今を楷成して、「觀經疏」四卷の註釋を著わし、外かに、行門の書として「法事讚」二卷、「觀念法門」一卷、「往生禮讚」一卷、「般舟讚」一卷を著わされた。これら五部九卷の撰述の中に、私たちは大師の魂を見ることができると云えよう。内外兩面の豊かな經驗と努力とがこの中に蓄積されているのである。

長安を中心として、諸方の人々を化益され、文字通り、「自ら信じ人を教えて信ぜしむる」のごとく、自行化他に終始せられた大師は、十ヶ年は實際寺に住し、唐高宗永隆二年（六八一）三月十四日、六十九歳を一期として入寂せられた。わが天武帝白鳳九年に當る。往生傳にはそのことが「吾將に往生せんとす、住すること三兩夕なるのみと、忽然として微疾室を掩ふ、怡然として長逝す、春秋六十九身體柔軟、容色常の如し、異香音樂久しうして方に歇む、時に永隆二年三月十四日。」と傳えられている。樂邦往生の素懷を遂げられた大師の遺骸は、萬人の盡きせぬ悲哀の涙に送られて、弟子懷懃等によつて大師生前殊に因縁深き終南山神和原に葬り、塔を立て厚くその遺勳を傳持したのである。

☆ ☆

今、不用意に法然上人のおことばを想い出さずには居られない。

「われ浄土宗をたつる心は、凡夫の報土に生まるることを、しめさんがためなり。(中略) 諸宗の所談ことなりと雖も、すべて凡夫報土に生まるることを許さざる故に善導の釋義によりて、浄土宗を立つる時、即ち凡夫報土に生まるることあらわるるなり。(中略) 若し別の宗を立てずば、凡夫報土に生ずる義もかくれ、本願の不思議もあらはれがたきなり、しかれば、善導大師の釋義にまかせて、かたく報身報土を立す。これまつたく勝他のためにあらず。云々」

淨業を成ずるものが浄土に生まれるということは當然であるが、罪深く惡業を重ねねば生きられない愚かなる者が、彌陀の浄土に生まれることができるという。この凡入報土の宗教的大運動が、大師によつてはじめられたのである。勿論わが法然上人によつて完成されたという事は云うまでもないが。ここに私たちの大師禮讃がある。今や偉大なる彌陀の大悲、莊嚴なる本願の深意は遺憾なく開展された。そこには只如來に對する合掌があり、讚美があり、禮拜があるだけである。聖道自力門の聖壇にかがやける如來は見上げねばならぬ近づきがたい佛で、人々はその前に跪いて謹慎し威儀を正しくせねばならない。ところが、浄土他力門の如來は親しみのある溫味のある如來で、み手をさしのべてまで、私たちを愛撫したまう大み親である。この親しみのある如來こそ、大師の信仰の背景なのである。大師は赤子のように絶大の信頼をもつて、願王阿彌陀佛を南無し

禮拜し、そして供養された。その弟子たちや世の人々には「南無至心歸命禮、西方阿彌陀佛」と回願するように教えられた。そして偉大なる大師の後繼者法然上人は、「南無阿彌陀佛、往生の業には念佛を先となす。」と宣言されている。

かかる大師の思想の基調となすものは、やはり凡夫の自覺にほかならない。散善義には、

一には決定して深く信ず。自身は現にこれ罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかた常に没し常に流轉して出離の縁あることなしと。

二には決定して深く信ず。かの阿彌陀佛四十八願をもて衆生を攝受し給う。疑いなく慮ばかりなく彼の願力に乗じて定んで往生を得と。

「自身は現にこれ罪惡生死の凡夫」何という底知れぬ深さに充ちた宗教的認識であろう。大師以前には類のないことばである。法然上人は自ら「愚痴の法然、十惡の法然」と云われ、親鸞聖人又自ら「愚禿」と呼びかけている。しかもそれが基をなすものは、大師の「罪惡生死の凡夫」であつた。このことばは、深刻に自分自身をつかんだことばである。自分を罪の人間だと見つめることは、人間としてたえがたき寂しさであり、恐しさであるに違いない。「見えなくても罪は罪」という諺があるが、見えざる罪の存在に驚くほどの人でなければ、罪の人としての自覺はとても味いえないであろう。「汝自身を知れ」というそのことばを自らの愚しさ、罪深きことの反省なきに恐しさを覺えずには居られない。

罪惡生死の凡夫とは、ろうれつな欲望の奴れいとして生きてゐるあさましい人間の相であらう。知恵の眼のつぶれた人間のことである。倫理もたまたれず、心も落ちつかず知恵もひらけず、三學のうつわでない非常にみじめな愚かなものであるということであらう。こうした人間は、倫理やかつての宗教では救われないのである。勿論、學問でも藝術でも救われない人間である。救うべからざる呪われた存在、贖劫よりこのかた常に没し常に流轉して出離の縁あることなき人間——このような恵まれないものの現實をどうするか。この恐るべき現實をじつと凝視したところに大師の思想の根底がある。

この呪われた存在、このみじめな暗黒を照らすべく「攝取不捨」の慈光をかかげて五濁の巷にさまよう世の人々に往生の道を教え、知恵あるものも、なきものもひとしく淨土に往生せんことを導かれたのが大師の全目的であつた。誰でもありにし自分の生活を、新しき生命の光に照してみれば、すべてが暗黒であり虚偽であり罪惡である。新しき生命は罪惡生死の凡夫という自覺にはじまる。罪惡は罪惡の自覺とともに生まれる。新しき生命のかがやきは罪惡を滅するものではなくしてむしろそれを認めるものである。うむものである。罪惡に徹することが佛の慈光を仰ぐの途である。

それは又、自分の力だけでは永久に救われないという謹讓の自覺ともいえよう。ぬかづいた姿である。合掌せる心境である。佛の光にあこがれゆく、至心信樂のところである。かくして罪惡への意識は佛への意識に誘いすすむ。罪の人間であるという自覺は阿彌陀佛への志向を増長するのである。

そこに、阿彌陀佛の本願力の把持がある。「我れは汝を求む、かくて我が魂は生く」大師の宗教は如來の本願を信すること、依つて救われるのである。「決定して深く信ず」ということは決していい加減な妥協ではなく如來に對する全人の歸依であり心からの信賴である。すなわち絶對歸依の信仰であらねばならない。自己のすべてをお任せした姿である。それは本來の自己の復活ともいえよう。佛と自己との眞に融合したすがたである。その境地には疑いの存在など許さない。そこには如來が實在せねばならない。本願力の躍動がなくてはならない。まことの信仰生活に於ては如來を實在とせねば止まないものである。否、如來が實在化するというよりも、寧ろ實在として現れるから、絶對歸依の生活がはじまるのである。如來の實在は問題ではなくして事實である。しかも、すべての存在が基礎づけられ派生する最も根本的な實在である、大師のいわゆる「疑いなく慮なく彼の願力に乗ずる」一人の世界においては、如來は當然實在する。大師の生活を支えたものは概念の如來ではないのである。

大師が「罪惡生死の凡夫」たることを認識し、そしてその最後の原動力を彌陀の本願に求めたかぎりにおいて、大師はたぐいなき價值を有する。そして觀經疏のなかの一心に専ら彌陀の名號を念じ、行住坐臥に時節の久近を問はず、念念に捨てざる者、是を正定の業と名づく、彼の佛の願に順するが故に。

の法音はやがて永遠の響きつらなる轉法輪であらねばならない。この一文こそ、私たちは魂の奥底深く響かせ全きところを揺さぶらせて味うべきものであらう。

鎮西上人

眞野龍海

(一)

上人は淨土宗第二祖として法然上人より、淨土の教を受けつがれた。諱を辨長、聖光房辨阿と號しましたが、鎮西に生れ、そこで教線を張られたので鎮西上人とふつう呼んでおります。

應保二年（一一六二年）五月六日、筑前國遠賀郡香月の莊に生れ、七歳で同國の菩提寺妙法法師の下で佛門に入り十四歳で得度せられた。其後、三ヶ年同村の白岩寺唯心に學んだ後、明星寺常寂に天台を學べたが、究學の志抑えがたく、遂に二十二歳、學僧の憧れたる比叡山に長途笈を負うて登られる事となつた。

(11)

叡山に於ては専ら當代切つての學僧寶地房證眞法印に師事し、天台の教義を學べたのであつた。この法印は、奇しくも法然上人の師黒谷慈眼房叡空上人の菩薩戒の弟子であり、いわば、法然上人とは兄弟弟子とでも云うべく、此

點、鎮西上人も「一室の同朋なる故に二世の契り深し」として、感激一入のものがあつたようである。

法印につき學ぶ事六年にして建久元年（一一九〇年）一旦郷里に歸られ、推されて、油山の學頭となり、學僧の育成に専心される事となつた。

所が、たま／＼舍弟三明房が卒然として急死したので、深く世をはかなまれ、之が今までの學解の門より、淨土に志向されていく一轉機となつた如くである。そして叡山に學んでいた頃、一山を根底からゆり動かせた念佛の開教者法然上人の事が、想い出されてきた。

恰も、郷里の明星寺再建の依頼が信徒よりあつて建立に着手されたが、建立成つて新に本尊を迎うべく建久八年五月、上洛された。そして京極綾小路なる佛師宅に滞在在中、聞き及びおりし法然上人の吉水の坊に訪問されたのであつた。

法然上人は懇篤に念佛の教を説き出されたが、その廣大

なる佛教の地盤と深遠なる淨土の宗意は、鎮西上人に新しい門出を決意させた。連日、聽聞に參じ、三ヶ月に及ぶころ、かの依頼の佛像が完成したので、再來を誓つて一たん故郷に歸られた。法談の間には、證眞房の事、同じく叡山での天台を學ばれし日の事等親しく語合われた事であつたろう。時に、法然上人六十五歳、鎮西上人三十六歳であつた。偶然にも翌年法然上人に入門せられ後、門下の逸材となつた幸西上人も、叡山に天台を學ばれていたが弟子の突然の不幸を契機として法然上人の門に入られたのが三十六歳である。

歸られて信徒への約を果された上人は、もはやひたむきの淨土信仰に燃え、翌年には師命による伊豫の教化を行つて、活動の火蓋をきられたのであつた。法然上人もこの年の三月には淨土宗の綱要書たる選擇集を選せられ兼實公に與えておられたが、頼もしい印象を残して行つた鎮西上人の歸洛を心待ちにしておられた事と思われる。

やがてその翌年建久十年二月再び鎮西上人は吉水の庵室に戻られたので、選擇集が附屬された。それからというものには朝に夕べに法然上人の傍に在つて聽聞給仕せられた。

そして六年の歲月は過ぎ元久元年(一二〇四年)に師上人の傍を離れて故郷に向われる頃には、一器の水を一器に移すように残りなく淨土宗の本意は鎮西上人に受け取られたのであつた。法然上人はもう七十二歳の御齡である。しかも念佛の法門はまだ、茨の道を覺悟せねばならなかつた。信賴すべき弟子との離別は感無量なる事であつた。だが、法然上人は、源空の所存は皆、御邊に申し終つた。他に所存あらば梵釋四王を證としようと思筆して與えられ

、この弟子こそ、淨土宗をつぐもの、後代に弘めるものであるという全幅の信賴を表明、後を憂えず、法の西海に擴がるを喜び合われたのである。

(二)

西下せられた上人は、中國、筑前、筑後、肥後と地方教化に挺身せられた。行く所、道俗參集し、寺宇の創建四十人に及ぶと傳えらる。中でも郷里香月の吉祥寺、筑後の善導寺博多の善導寺、青木の正定寺、光明寺、莊司の本誓寺、宮田の極樂寺であつたが、特にその中心となつたのが、筑後の善導寺であつた。一寺を建てるだに大へんな事であるのに、かく盛大を極めたる事は、上人の宗義宣揚の力と日々、日課、六萬邊、六時禮讃、六卷の阿彌陀經讀誦という念佛行と共に地方の人々がはじめて佛法を淨土平等の教によつて、だれもかれも味いする喜び、じつとしておれなくなる喜びが卒直に示されていると思う。

さて、このように乾ける地面に水のしみ入るが如く、念佛の聲は、瀾つて來た。しかし、法然上人開宗時代から絶えず二つの問題を考慮しなければならなかつた。

それは、念佛の教が、其までの難かしい佛教の理論を一舉に捨て、念佛を稱えれば誰でも往生できるといふ此以上簡単に出來ない教であつた事から、一には、その難かしいとされる側の宗團から易しい念佛の法門は正流でないといふ意味から直接間接の手嚴しい壓迫と、二には易しいといふ點に溺れて規律を無視する徒の横行とであつた。法然上人が建曆二年(一二一二年)に亡くなられると、更に、念佛門と稱する者の中に、異義邪説が目立つて來た。之に對して、二祖としての上人は、法然上人の本意を顯

わし、邪義を卻けると共に、既成教團の教理、つまり佛教傳統の教ともとる所なき事を明かにする必要があつた。

この中、佛教の正統から踏みはずしていかないという教相的な説明は、今日からすれば、あまり重要でない——といつては誤解があるかも知れないが、少くも本質的な問題ではない。今日では淨土教がいかにも正當佛教であるか、というよりは、いかに人を生かす宗教であるかが第一問題である。しかしながら、當代としては、まだ——淨土宗は天台等の付屬的傍系的一派として、きめつけようという動きの方が大であつた。法然上人在世時代からの法難は、所謂滅後の法難として、法然上人の御墓所すら安穩でなかつた事を思うと、一事が萬事了解出來よう。勿論、宗祖門下の諸上人の献身的傳道によつて佛陀平等の慈悲の法門は滔々として西に東に擴り根を張つていつたが、山門の徒の迫害は暴力を伴つて激しくなつた。嘉祿三年（一二二七年）には宗祖の御墓を毀たんとし、次で隆寛、幸西、空阿の三人を流罪とし、選擇集の板を焼いたりした。

風の便りは鎮西なる上人にも達したであらう。翌年（一二二八年）上人はすでに六十七歳、淨土宗の正意が内外に失われんとするを憂え、肥州白河の邊、往生院に二十有餘人の念佛者を集め、阿彌陀佛四十八願になぞらえられたか四十八日の日夜を限つて別時念佛を修し、其間、念佛の正行について昔聞と相傳により未代念佛授手印一卷を撰述せられた。一宗の大意が六種二十二項目にまとめられ、特に信心内容については委しく、質疑問答形式で説明があり、其點で、法然上人の選と傳える「往生記」、良忠上人の「未代念佛授手印領解鈔」と合せて三卷書として、淨土宗の相傳の書となつてゐる。此外「淨土宗要集」六卷（西宗要と

稱する）「徹選擇集」三卷（いづれも七十六歳撰）等八種の書を著わされ、宗義を明示せられた。

入寂の二年前、上人が筑後上妻の天福寺に掛錫しておられる時、石州より記主上人（三祖）が訪ひ師事される事となつたが、その法器たるを見て、之に全てを繼承され、嘉禎四年（一二三八年）閏二月二十九日、筑後の善導寺に於て西化せられた。時に七十七歳、最後まで破邪顯正の活動を止める事なく、淨土の法門、西に大に伸長したのであつた。

(三)

念佛の心構、念佛生活を推進せしめる信心のあり方について至誠心・深心・廻向發願心の三心を本宗では説きます。之について鎮西上人は「そも——此の宗の一大事は三心なり。弟子（鎮西上人）、上人（法然上人）在生の時、よくこの御教訓を蒙る」と云われ、誠實な心で念佛を奉修するよろに訓されてあります。

又、其を身を以つて上人はお示しなされ、今日鎮西の地に念佛の法門が盛んなのは一に上人のこの基礎づけによる所が多いのであります。

跡を一廟に指示すれば念佛の法門は普ねからずという法然上人でありますから、汝を淨土宗の第二代とするという御言葉もありませんが、先に述べました師上人の信賴、又鎮西上人の御著に拜される淨土門の祖述の程を見ても、まことに自ら淨土宗二祖として立派な方であります。異説の生じやすい當時にあつて、其の教化と相待つてよく本宗の基礎を構成された事は、その相傳の書とともに不朽の名を宗史に留めるものであります。（大正大學印度哲學研究室）

生涯の主人記



道 法 野 大

一、浄土宗の開東進出

浄土宗は、宗祖法然上人の門人によつて、早くも關東へ廣められた。有名な武藏國熊谷の蓮生坊があり、遠江國へは禪勝坊が行つたし、また相模國飯山へは隆寛律師が赴いたことなどがあつた。しかし宗門の正系について、しかも政治の中心地である鎌倉に基礎を据え、ゆるぎなき法灯の光りを高くかゝげられたのは、わが第三祖の記主上人である。

當時の鎌倉は、幕府の所在地だけに、各宗の高僧が集まつた。昔の奈良の都に盛んであつた律宗の流れを汲んで、しかもその復興に大なる實績をのこした叡尊、その門人で療病事業に力をつくし、日本社會事業史に燦然とかゞやく極樂寺の忍性、中國から來た建長寺開山の蘭溪道隆、圓覺寺開山の子元祖元、それから法華宗を創立した日蓮は意氣衝天の勢で辻説法に人々の耳を傾けさせていたのであつた。こうした時代に浄土宗の念佛が、正式に此地に植えつけられるべきは當然であつた。

二、修學と傳法

上人の名は良忠、また然阿彌陀佛と號された。記主とは伏見天皇から七回忌の時に下された勅謚號である。

生國は石見の三隅で、正治元年(一一九九)であつた。

こゝは現在には島根縣那賀郡三隅町で上人の生誕を記念する良忠寺が建つてゐる。

父は圓尊と稱し、太政大臣藤原師實を先祖とする名門であつた。上人は十一歳の時に、有名な往生要集の話を聞いて、早くも佛をなつかしむ心が起つたと傳えられてゐるが、後日に淨土宗の名僧として、不滅の業績をのこされる萌芽は、既に幼なごころに發生したのであつた。

修學の道は、初めて當時山陰地方の學山として知られてゐたところの、出雲の鰐淵寺に入門したことに始まる。その寺で得度をうけて僧となつてからは、廣く佛教を學修することに精進し、各宗の思想をそれ／＼の大家について研究されたのである。その後三十四歳で故郷の一寺に閉ぢこもつて、道を求める心の練磨に餘念がなかつたが、靜かな生活の中に突然に大きい機會が表われたのである。

それはある日、舊友の一人が訪ねて來て、これから一しよに筑紫の聖光上人のところへ行つて、正しい淨土の道を聞こう、というのであつた。かねてから淨土の道に心を惹かれていた上人に、この舊友の訪れは、願うてもない喜びであつた、あせることなく慕らに、求める所に機會は舞い込むものである。早速に兩人は相携えて鎮西の上人を訪ふたのである。之が實に二祖と三祖の初對面で、時は嘉禎二年（一二三六）、七十五歳の圓熟境に達せ

られた老上人と、三十八歳の壯士勃々たる求道僧との、水乳一和の默契はこの時に成り立つたのであつた。

その後は法然上人の念佛の正義を傳受することに専念し、多くの宗典を學んだが、また二祖の心血をそ／＼がれた述作である末代念佛授手印を授けられて、正傳の印信とされたのである。そこで上人は淨土宗の正系に立つた感激をこめて、その書を心腑に納めた趣きを記して領解鈔を著わされた。師の聖光上人もこうした後繼者を得たよろこびをこめて、

然阿（記主上人の號）はこれ、予が若くなれるなり。と申されたのである。この一語こそは實に全身の信賴と共に更に淨土の道の安泰を含んだ、千鈞の重さある言葉ではないか。

三、諸國の教化

それから鎮西を辭して約十年間は、石見、安藝に教化し、五十歳寶治二年（一二四八）の春に、京都の法然上人の遺跡を參拜し、宗祖門下の生存者——嵯峨二尊院の正信坊湛空、往生院念佛坊、清水竹谷の乘願坊宗源などを訪問されたが、特に宗祖の吉水禪坊（今の知恩院）を相續した勢現坊源智（平重盛の孫）の門人の蓮寂坊と會談して、各自の思想が完全に一致したことを喜ばれたのであつた。その時、後嵯峨天皇の勅召によつて、淨土三

部經の御進講をつとめられたが、それより歩みを伊勢路に取つて、日永の兩聖寺、六呂見の觀音寺を創立し、信濃の善光寺に參拜し講席を張り、松本の生安寺、更級の西教寺を建て、進んで上野、下野を経て、下總に向われたが、水海道の報國寺に留錫されたことがある。

下總と上總は、もと宗祖に歸依した千葉胤頼の子孫の所領で、淨土の道に親しむ人が多かつた。上人は鎌倉へ出られるまで約十年間は、この地方で講説と著述に専念されたのである。淨土大意鈔は建長二年、選擇集決疑鈔は同六年、三心私記、論註聞書は同八年、決答疑問鈔は正嘉元年、視經疏傳通記の初稿は同二年、俱舍論抄宗要集は同元年、淨土宗行者用意問答は同二年で、これらは下總であり、禮讚聞書は建長八年、法事讚聞書は同年、群疑論聞書は同年で、これらは常陸である。かくて多くの門下や信徒ができたのであるが、また寺の創建も、西晉寺、光泉寺、東林寺、圓明寺、極樂寺、金照寺、長樂寺、涼風庵など數多くあつた。

大體六十歳頃から鎌倉へ出られた。始めは大佛谷の淨光ひじりの所に居られたが、やがて執權北條經時（時頼の兄）が建てた佐介谷の蓮華寺に招かれることとなり、その寺は間もなく材木座に移轉して規模を廣げ、天照山光明寺と改稱しその開山に請ぜられるに至つた。これより光明寺は淨土宗の根據地として、來集する人々が多く

なり、上人の後は門下の寂惠良曉が紹ぎ、代々その法脈が續いたのであり、第八代の視譽祐崇上人は、後土御門天皇の勅命をうけて、この寺に初めて十夜法要をつとめた、之が「お十夜」という淨土宗の恒例行事の始めである。その後、上人はこの寺で講義と述作に熱烈なる教化を爲されたが、二十三歳ほど若かつた日蓮上人から、念佛門に對する論敵として目指されたことによつて、上人の力のほどを察知することができると思う。

鎌倉での述作では、現經疏略鈔、往生兼註記、選擇集略抄があり、傳通記の第二回の校訂がなされたのである。また武藏の箕田へ行かれて、曾ての受學の師であつた勝願院良遍を追憶して勝願寺を建てられた。この寺は江戸時代に鴻巣に移されることゝなつた。

四、上洛と光明寺入寂

上人は京都に居た門人の慈心、然空などから、しきりに上洛を懇請するので、七十八歳でその願いをかなえられた。間もなく後宇多天皇の勅召によつて淨土の道を説き、且つ御授戒を行われたのである。京都では門人の指導に講説や授戒をなされた。述作としては選擇疑問答、安樂集私記、淨土宗要集、往生要集記がある。この間に門人望西樓了慧などに傳法授戒をされたのであつた。

在京は約十年であつて、米壽の歳に鎌倉へ歸られ、寂

恵に付法狀を與えて、淨土宗の永く世に傳わりゆく道を開かれた。之はその後に關東でこの宗が盛んになり、傳法という言葉を立てゝその行儀を行うようになった一つの由來を成すものである。然るに弘安十年六月から病の床に横臥されることとなり、人々の至れる看護のかいもなく、遂に七月六日に往生淨土の本懷をとげられたのである。實に八十九歳という稀なる長壽の御生涯であつた。

上人のこの長壽の御生涯は、念佛の槌(つち)をもつて鍛えあげた、練磨向上の尊い人生の出現であつた。それには日日の機會に對しておろそかならざる修道の一路を歩みつゞけられたのである。そこには人生に處するに、苟くもせざる一念、わが身の天職をまつしぐらに奉じようとする一心が、たゆむことなく生動して居り、東西に廣く教化をなされた實績も、祖道の精神を發揮された多くの著作も、皆この一念一心の生活具現に外ならないと思う。念佛の信念が形成した人生の結實は、うるわしくめでたき限りである。こうした第三祖をもつてゐる淨土宗に屬する身のさちとゝもに、上人に報恩し感謝しまつる心の、不斷につゞく日日である。

五、思想

上人の五十餘帖の著作は、淨土宗學の規範として、この道の正義を堅持するものである。しかも佛教の廣博な

る經、律、論、章、疏を自由に資料としたもので、その學殖のゆたかさを偲ぶに充分なものであるが、こゝでは上人の思想の特色あるものだけを擧げることとする。

上人は「正しく本願を信じ、かねて因果を信ず」と言われる。淨土宗のこゝろが、阿彌陀佛の本願の行——念佛を淨土往生の唯一の道として信ずることはいうまでもないことである。しかし何故に「かねて因果を信ず」べきであらうかと言いたくなるが、こゝに重要な意義がある。もと因果ということは人間の常識である。この常識の論理を以て、結局は念佛往生の不思議を知らしめようとするに外ならない。人間の最後の住み家——人生究竟の境地、即ち佛の世界たる淨土への道は、因果の立場から去妄證眞か、積徳修善とするか、或は別に分別の限りでなく信すべきものとするかである。しかし頭から信ずるといふことには困難があるから、常識の因果から諸行往生説をもつて、佛界のありかを知らしめたものと受取られる。しかし之は「ちりも積れば山となる」というのと同じで、實際には人の世に於て、塵を積んで山としたゝめしはないから、「千が中に一もなし」と、淨土宗はきつぱりと之に見切りをつけて、どこまでも佛行の念佛に佛界とのつながりを感じるのである。念佛門において、諸行往生説をいうのは、その道の逆轉などとは、誰がいうことであらう。

(大正大學教授・文學博士)

近頃保育隨想



内 山 憲 尙

「風呂屋やろうか幼稚園にしようか」という言葉があつたかどうか知らないが——昭和二十八九年頃の所謂幼稚園ブーム時代には正にこの通りではなかつただろうか。

東京都内では終戦直後百にたらなかつた幼稚園が、昭和二十九年頃には五百から六百になり今日では七百以上に達している。實に一大驚異と言わざるを得ない。

風呂屋の爺父さんや土主のおとつちやんや土木業の親方が、算盤はじいての幼稚園經營は全くこまつたものである。トニー谷ではあるまいが、算盤はちいて子供を數え、親の御機嫌とりもち竿で、さしてとるのは保育料。

☆

いや、我々保育に携わつてゐるものも反省しなければならぬ、論語ではないけれど、吾日三省吾身。爲人謀而不忠乎。與朋友交而不信乎。傳不習乎。於保育不備乎。

☆

壇家が少くなつたし、境内は廣いし儲かるそうだから——とて幼稚園や保育園を經營されてはこまりますぞ。そもそも幼稚園と保育所の區別がわかりますか、これが本當に（明確に）答えられないで、幼稚園、保育所を經營す可からず。

☆

本年あたりから幼児は減少し（産制其他で）反對に幼稚園、保育園の數は數は増加するし、一寸景氣が悪くなつて全國を通じて入園兒の數は三割乃至四割減だそうだ。

——こうなるとぼつぼつ始まる見苦しい幼児争奪戦である。

聞くところによればある公立幼稚園では、入園適齢児の家庭を一軒づつまわつたとのこと、又ある園では五名紹介すればランドセルを贈るとのこと、この間もこちらの保育学校の昨年度の卒業生が「どこか外にかわりたい」といつて来た、事情を聞いて見ると園長さんが「不景気だから教諭一人五人を勧誘して下さい」と責任額(?)を持たされたが、どうにも出来そうにもありませんというのである。

☆

ポスター合戦、勧誘合戦、通園バス(スクールバス)合戦、あらゆる手——あの手、この手を使つての園児獲得戦——いやなことですね——儲ける心算で始めた仕事、赤字じや約束がちがいます。

☆

質や内容よりも、外観の見栄だけが生命といった園もありそう。保育のホの字も知らなくとも、学校教育法がどんなものだとか知らなくとも、眼あき千人、眼くら千人の眼くら千人とりや経営は出来る。

☆

佛教保育祖、法均尼は地下で泣いていることだろう、幼稚園の祖フレーベルは墓の中でなげいているだろう、保育所の開始者、ロバートオーエンはうるんだ眼でながめていることだろう。

☆

佛教徒だけは眞の保育精神に生きたいものである。算盤をすてて、本當に幼児教育のために全身全霊をささげたいものである。

かすみ立つ永き春日を子供らと

手まりつきつつ今日もくらしつ

良寛さんの氣持ちになりたいものである。本當に子供を愛す氣持、子供のために生きたいものである。私の坐右の銘は

童心即佛心

である。私はこれを書齋の桂にかけていつも眺めている。そしてこの氣持さになる可く毎日毎日努力している。

日曜學校のあゆみ

三重縣津市 天然寺
明照 日曜學校



山口 謙 次

この明照日曜教園と名付ける日曜學校は、二十年程前に創立せられ、長く續いたが戦争で中絶した。それが再び軌道に乗つて生れたのは、今から四年前の涅槃會に近い日曜日のことであつた。集つた子供たちは二十名位だつた。

日本の文化史の大きな主流となり、秀れた精神的指導性をもつた佛教が、現代に於いては大伽藍を誇り、生活様式にのみその形を残して、その精神が弱められている現實にはあまりにもなさけない。

佛教の眞の姿が再認識されなくてはならないし、それは私たちの力で養い育てなくてはならないと云う實感から、私たちのこの日曜學校は生れた。そして私たちは、子供たちが自ら感じとり學びとつて

いけるように力強いパトスの場をつくりたいと考えた。

先生はこの「浄土」の編集に當つていられる眞野龍海氏の母堂に當る前田敏子先生と私の二人であつた。子供たちは前田先生を「おばさん」と呼んで親しんだ。このおばさん先生が法話を、私が童話等を受けもつた。又、大學在學中の中村・西井・小笠原・佐々木の諸君の協力も得た。會費も無料にしようと考えたが、子供の數よりも着實な繼續を主とし、又、資金もなかつたので會費を二十圓とした。子供の數は次第に増えた。

私たちが出發した最初の日曜學校のモットーは「繼續は力なり」であつた。各自多忙な仕事をもちながら續ける困難は承知の上だつた。中學校につとめる私には私自身の休日がなくなつた。宿直や學校行事の時は代つてもらつたりした。毎月の地方史研究のための見學も出來なくなつた。

春は花見の遠足、夏は海水浴、そして紙芝居や劇やスライド、境内では運動會や球技が子供たちを樂ませた。子供たちの中で始めのうちは喧嘩や對立もあつたが、それがいつの間にか融け込んでしまい、私たちの氣持が通じたのか時には新たな友人を誘い、小さな對立があつても周圍からそれを止めさせてしまうようになった。子供たちを最も樂ませたのは花まつりの餘興であつた。ひと月も前から各自で相談して劇の配役を決め、姉の着物や父親のどてらを持ち出したりして大騒をし、チグハグなコーラスをやつたりする。花まつりが終るとその思い出の作文集が印刷された。こうして一年、二年と子供たちとの親しい集いは續いた。

しかし、私たちはこれに満足は出來なかつた。日曜學校はたゞ續いているだけではない。もつと前進させなくてはならない。例

えば讀經に四誓謁を訓讀にしたがそれでもまだむつかしい。むつかしくて解らないのだから讀經は止めた方がよからうか。何か行きづまつた氣がした私たちは、機會ことに日曜學校の仕方を聞いて歩いた。京都へ出かけた機會に何か參考を得たいと思い知恩院を尋ねた。しかし知恩院では何らの暗示をも知られなかつた。總本山にも日曜學校は出來ていなかった。歸途、列車のすみでやはり自分自身で考えなくてはならないのだと思つた。ゲーテの言葉が思い出された。「人間は努力する限り迷うものだ」と。

樂器もハーモニカでは貧弱なので寄付をつのつてオルガンを求め又子供たちの作文の朗讀をおつとめの中に加え、おつとめの司會や獻燈獻花も子供たちの中で決めて行かうにした。子供たちも幼稚園から中學三年まで集るようになったので、中學生の部として水曜日の夜、水曜會として開いた。日曜會は朝早く六時から始めるのに子供たちは誘い合せて一時間も早くから集つておどかされたこともあつた。終つた後は掃除をすることもおぼえた。年の暮になると境内附近の枯草を刈り集めて風呂をわかつて子供たちを順番に入らせた。味噌汁を作つては會食をして食作法を習つた。中學部の水曜會の生徒の要望で數學や英語を見てやつたりした。夏、水曜會の生徒がおばさん先生に連れられて伊吹山に登山したことは大な思い出となつた。合宿して作業や語り合う計畫もした。

しかし、日曜學校もマンネリズムに陥り易かつた。それを打開するために、昨夏思い切つて三日間、市内の一劇場を朝のうちかりて「佛の子供の早起會」を開いた。折しも、津海岸で中學生の水難事故があり、早起會の第一日はその追悼會を行い、又、事故現場へ出かけては子供たち各自で可憐な追悼文を讀んだ。

努力すれば成果は上り、工夫すればその道は開かれた。おつとめも私たちがいなくても子供たちで出来るようになり、氣持も全く一致してきた。しかし、あまり上手になつたので新たに入會したい子が皆について行けなくて困るようになった。日曜日の一回を二回にしなくてはならなくなつた。こうなると私たちの時間的な制約もあり、すぐには出來なくなつた。子供たちの時折りの作文から作文集がつくられ、又、藤井實應先生の葉書通信に範をとり「明照だより」を毎月一回發行することになった。津市南郊の高茶屋地區で本園に見習つて日曜學校が昨年暮から發足した。

こうして私どもの日曜學校は滿四年の涅槃會を迎えようとしていく。毎年、涅槃會には一年間の出席による賞が出る。今年も又、前進の歩みをつづけたいと張切つていく。

〔お願い〕

私はこゝでこの日曜學校が滿四年になるのを記念して、この「淨土」をかりてその様子をお傳えしたいのですが、そこでこの新批判をお願いしたいと存じます。既に述べて参りました様に私たちはなるとけ生きた佛教精神により日曜學校を進めて参りたいと願つていきますので、こゝでは同じ日曜學校を開いていられる方に參考にして頂き、同時に御指導、御批判を願いたく、なるとけ具體的に述べて参りました。私たちの意をおくみとり下されこの「淨土」を通じまして同志相はげまして進めたいと存じます。(三重大卒・教官)

x

x

x

x

ホノルル通信

—第三信—

ホノルル浄土宗別院にて

松 壽 弘 道



前回にアメリカ人には誇りは有るが、虚榮心が少ない事について一寸觸れましたが、ではそのアメリカ人の誇りは何處に見出せるでしょうか。此處に二、三の例を取上げてみた

と思います。まず身近な處では自分を誇ります。と云うとお可笑しい様に聞えるかも知れませんが實際自分の身體全體で體當りして來ます。アメリカ人の個性は抹殺され、機械の一部の如き役割しか演じていないかの様に想像し勝ちですが決してそうではありません。かえつて機械文明の發達に平行して強い個性が要求されると云つて決して過言ではない様です。何分、傳統、肩書の通用しない國ですから、いくら偉そうな事を云つたり肩書を振廻してみた處で誰も信用致しません。その時、その場限りの實力で人を評價する。待つた無しの世界です。ですから如何にして自分の誠實さを表わすか、或は人を喜ばせるかに全力をそそぎます。その點、日本では親の笠を着るとか、團體やら著名の權威の袖にぶら下つて威張らない迄も得々としている自稱進歩人が見受けられる様です。

次には自分の妻を誇ります。よく日本では「家の愚妻」とは云つて自分の妻を卑下しますが、こちらではその反對です。だつて自分の最愛の人を妻として娶つたのですから、貶す理由が分りません。妻を貶す事が愛情を表現する逆説的手段だ等と一應理由づけられない事はありませんが、はたしてそれ程日本の

旦那様方は奥さんを愛し、誇つているのでしょうか？ もしこちらで他人に自分の妻を貶したら即日離婚狀を突き付けられます。

その次には自分の職業を誇ります。自分の現在の職業が神聖なものであり自分が文化、文明社會になくはない職業の一端を擔つていふのだという觀念があるので、誰に聞かれても臆せず自分の従事している職業を明言します。日本でしたら若い人は親の職業をかくし、一般の人達でも自分の職業をのべるのに躊躇している人が少なくない様です。いや／＼ながらやつている職業で能率が上り、社會が向上するとでも考へているのでしようか。それともこの世に別に何か理想的な職業が存在するとでも夢みているのでしようか。こちらの諺に「隣の牛はよくみえる」というのがあります、もう少し自分の職業に尊敬を持つていふのではないのでしょうか。

それから自分の周圍の人を誇ります。よく日本では誰にも見境なく周圍の人を貶す人をよく見かけますが、こちらではそういう人はいない、その人が引立つところか、何故そんなに悪い人を隣人に持つていふのかといふかります。自分を信じていますから他人を信じ決して疑いの心を持ちません。他人をうら

やんだり、にくんだりするのは世の常ですが陰口をきいたり、缺點をあげたりするのは良識ある人間の爲す業でない事をよくこちらの人はわきまえてゐる様です。

最後にこちらの人は自分の國を誇ります。

わずか二、三百年の間に未開の地より世界最強の國に仕上げた故人の偉業に尊敬の念を拂うと共にこの恵まれた國に生を受けた事を感謝しています。ですから主な官廳や商店の屋上には毎日翻翻と星條旗が翻つていますし、全ての學校では朝な夕なにアメリカ國歌「お、自由の國アメリカ」を吹奏してその間、全生徒は直立不動の姿勢になつて國旗に敬意を表します。日本なども、とやかく云われますがやはり恵まれた國の一つなのですから、もう少し國を愛する氣持があつても良い様に思われます。

以上五項目に一應分類して、アメリカ人氣質の一端に觸れましたが、そうかといつてアメリカ人と日本人と、そう明確な區別が出来ようはずがありません。至つて馬鹿／＼しい様にみえますが、こちらではこの様にコモンセンス（一般素養）が非常に尊重されるのです。日本ではこれに比較して、センモンセンス（専門素養）が尊ばれ、議論も抽象に走り

勝ちですが、こちらではむづかしい事をあまり好みません。日本ではむづかしくもない事をむづかしい言葉で表現しないと氣がすまないし、譯の分らない言葉でも難解と云う點で珍重する弊がある様です。實行も出来ない様なむづかしい事を世の學者や、道徳家、宗教家はあらゆる文明の利器（新聞、ラジオ、雜誌）を通じて私達に警告しますが、まづそれ等の人々が國を憂へ世の平和を叫ぶ前に自分の周圍を少しでも和やかにし、それにはまづ自分の家、自分の心を良く保つ事が大切なのではないでしようか。自分を良くするのは誰か？ 自分の周圍、自分の國を、この世界を良くするのは誰なのか、それは他でもない貴方であり僕であり、我々であり、この他に除いて誰もいない。ですから「貴方も心がけよう、僕もしよう、皆んなでしよう日本の再建を」。では又、皆さん御氣嫌よう。

佐山學順師

ハワイ巡教中食道癌で急遽歸國され、かねて岡崎大樹寺にて療養中の佐山學順師は五月二十二日午前六時十五分死去されました。

予 告

本誌七月號は吉田絃二郎先生を偲んで追悼特集號を計畫しております

句 集

先生を偲ぶ

鑽仰會と先生

先生の思い出で

評 傳

先生をめぐる人々

旅路の先生

四國遍路

著作目録

巴 御 前 と 覺 明



鶴 田 湛 泉

七

巴は無事木曾へ落ちのびることが出来たが、間もなく鎌倉方によつて捕へられてしまった。畠山が巴と一騎打して、その力強さに吞を卷いた武勇の程をきいた頼朝は、使を立て、鎌倉に呼び出し、森五郎の屋形に止め置かしてゐた。あはれ落日の粟津の露と消え果てた謀叛人義仲の妻として當然許さるべきでなく、巴は所詮首を刎ねられる運命となつてゐた。衆議既に刑死と決つてしまつてゐる巴の助命を頼朝にしきりに乞ふた者がゐた。外ならぬ侍別當和田義盛である。

美貌で偉大な體軀をした廿八歳の女盛の巴の容姿に魅惑され心を燃やしたのか、義盛は巴の助命を乞ふたのみでなく、我が妻にと懇願したのであつた。

「何を申すぞ義盛、巴は義仲のおもはれもの、既に刑死と評定は決つてゐる」

「なれど斬つて捨てるには、余りに惜しき勇婦にございまする」
「ウム」

「されば、かゝる勇婦を我が妻となし、殿の御ためとなる天晴れ豪の者を貰いたく」

「木曾の勇婦と、鎌倉の偉丈夫が夫婦になるか。義盛らしきことを申し居る。ウム、よきにはからへ」

大きくうなづいて頼朝は、義盛の卒直な願をきき、入れたのだつた。森五郎の屋形から、和田の館へ移されて來た巴は、

「妾を、お屋形さまの妻にと、鎌倉どのに願はれたとは、まことにございまするか」

頬に紅葉して義盛にたづねた。

「わつはつは、何を申される」

大きく手を振つて洪笑した。

「義盛が妻にと願つたは、實は巴どの、助命仕り、木曾へ落し参らせんための一時の手段よ」

「えつ」

思ひがけない義盛の言葉に、愕然として言葉も出ない。

「安堵されよ、義盛とて木石ではござらぬ。巴どの、心中は汲んでゐる。これより直ぐ鎌倉を落ちなされよ」

と、せき立てた。

「お情け過分に存じまする。肝に銘じて忘れませぬ」

情純な義盛の心に、感激の涙が巴の白い頬に流れた。

「早く急がれよ」

巴は義盛に一禮すると、用意された駒に一轅あてた。

和田の館を出た巴は、駒を武藏の入間川へといそがせてゐた。

義仲と巴との間にもうけた一子清水冠者義高は、鎌倉へ人質となつて大姫の掣となつてゐたが、義仲の敗北後三ヶ月、頼朝の命によつて、堀藤次の下臣藤内光澄の手で入間川原で暗殺されてゐたのであつた。

「思へば、不憫な義高よ」

巴はせめて義高の塚に詣でようとしてゐた。河原の石は露にぬれあたりに人の氣もなく淋しかつた。岸の垂柳さへあはれを催される。

ふと、しぶい讀經の聲が聞えてきた。哀調すらある心にしみるやうな聲である。見ると、さゝやかな塔に向つて敬虔に讀經する僧がある。いぶかしく思つて駒を下り近づく、覺明であることは後姿によつても察しられた。立女笠をぬいで、巴は後にひざまづき、靜かに目をとち合掌して我が子の冥福を祈つた。僧は讀經が終ると、人のたゞずむ氣配にふり返つた。

「おゝ、巴どの」

「覺明どの」

顔見合せて、二人は同時に叫んだ。

「お久しう」

「逢ひとうござつた」

巴は伏目になつて涙ぐんでゐる。しばし沈黙がつづいた。

「義高どの、回向仕らんため、これまでまかり越しました。巴ど

の、心中お察し申しまする」

舌も硬ばる思ひで、覺明の語が塞がる。

義高の最後を想ひ、巴の身の上を思ふて、淡々たる覺明の胸もつ

まり、聲うるませて目をしばたいてゐた。

「かうなるのも、この世の宿命とやらでございませう」

巴は、胸が疼く思ひである。

「して、覺明どのは、これよりいづくへ」

「されば、これより都へ旅立つ所存でございしまする」

「都へと、又何のために」

「さればの、憎怨の巷に沈んでいる世をのがれ山中に行ひすまざんとしましたが、所詮おろかな覺明さとりきれません。されば、都に登つて修行し直す所存にて」

「えつ、學才すぐれておはす文學博士のあなたが、修行し直すとは解せませぬ」

「いゝや、今高德の評判高く智慧第一と仰がれる吉水の法然上人さへ、自ら愚鈍の身といはれる。上人に比すれば、覺明如き少しの學問を誇れませうや、今より都へのぼり、上人の房をたずね淨土の法門を承りたいと存じて居りまする」

覺明は、法然上人に逢ふことは、胸の躍る思ひであつた。虚無的になつてゐる心に、何か得られるものと思つた。憎怨を越え、生死を越えて無碍の一道に生きるためには、淨土の教こそふさはしいと

思つた。

「覺明どのは、都より歸られなば、妾をも導き給へ、念佛とやらに救はれたう存じます」

「いと易き御奉公に存じまする」

夕陽は入間川原に落ち、肅條たるたそがれが、二人を次第につゝんで行つた。

吾妻鏡の建久六年十月十三日の條に、

「覺明が元の名信救得業と號して箱根山に住してゐることが幕府に知れると、彼が鎌倉並に近國に出遊徘徊せざるやう頼朝は、箱根山の別當に書を遣つて禁足を命じた」とあるが、これは、木曾殘黨の中でも、知謀をもつて聞え、武勇を身につけ且つ驚嘆すべき筆力の持主であり、彼のあるところ風雲を巻き起しかねない最も危険な人物と恐れたからであらう。

巴は、越中に逃れ一時石黒氏に頼つてゐたが、後尼となつて巴尼と呼ばれ、越後の友松に草庵を作つて、義仲初め木曾一族の菩提を弔ひ念佛三昧に入つてゐた。それは、諦めの中から見出した新しい生活であつた。かうして巴は、九十一歳の長壽を保ち、靜かな生涯を終つた。

元久の御難のとき、法然上人が山門へ提出した起請文の署名者の中に西佛と名乗る弟子が二名あるが、その一名は覺明であつて、西佛とは覺明が上人から與へられた名であるといふ。(了)



新興宗教の分析

— 新興宗教讀本 その八 —

竹 中 信 常

教義及び儀禮の近代化乃至社會・大衆化が活潑に行われる反面、なお、民衆が宗教に要求する「神秘性」を適當に加味することを忘れてはいません。佛教既成教團の如き合理的に洗鍊された科學順應性にくらべますと、寧ろ逆行的方向をたどつているといつてもよい程であります。科學に限界があり、合理的精神に信念的裏付けがない限り、民衆一般はなお未だ多分に「神秘嗜好性」を持つています。先述しましたように、宗教的常識の不足は、他の生活領域が合理化すればする程、非合理的部面を深めて行きます。この盲點を巧みについたのが新興宗教の教義の中格をなす「姓名判斷・墓相・憑格・巫術・降靈」等であり、これが同時に、布教上の有効な武器とされるのであります。先年金融問題で解散を命じられた、日本教團では教團本部に「催眠術」の講習會を開いて幹部に催眠術を習わせ、催眠現象と

いう神秘性を通じて、信徒を獲得しようとして試みました。巷間陋路に「町の祈禱師」が氾濫するのも、死靈と話をしたり、運命を豫見したり、過去の因縁をあばいたりすることによつて大衆の「神秘嗜好性」を満足させるからであります。新興教團の中でも可成り合理的・理性的な教義を持つといわれる生長の家でも、その究極の點に於いては「神想觀」という自己催眠的狀態を目標にしています。

以上、新興宗教の教義・儀禮が近代性と神秘性といふ全く相反した傾向を、一つの有機的組織にまでまとめ上げてその均衡を保たしめているものは、ほかならず「大衆の信仰心理」という紐帶なのであります。

六

信仰とは一つの心の持ち方といわれるくらいに、すこぶ

る主観性の強い、いわば一種の心的状態であります。従つて信仰をよび起こしたり、深めたり、他に傳えたりするには心理學的原理——特に最近では社會心理學的なマス・コミュニケーションの理論を適用することが、最も効果的であります。過去に於ける宗教的天才のすべてが同時にまたすぐれたる心理學者であつたといわれますのも、此意味であり、従つて、信仰心理の理解は凡ゆる宗教々團にとつて必要且つ不可欠な課題であります。

ここではむづかしい理論をさけて、新興宗教がこれにいかに応用し、いかなる効果をあげているかについて、三、四の項目に準じて述べてみることにします。

a 暗示と模倣

この項目は社會心理學的に重大な課題でありまして、特にマス・コミュニケーションの一類型としてとり上げるべきであります。この方面については稿を改めるとして、こゝには一應分析的にこれを明かにしてみます。

そこで第一に氣のつくことは、新興宗教の信者の大多數或いは少くとも一軒の家で一番先に信者になりますのは、殆んどすべて中年婦人で、而もその大部分が家庭の主婦であります。教團の側からいいますと、信者獲得の第一目標即ちカモになるのが、この中年の主婦といふことになります。試みに靈友會に於ける會員の實態を表にしますと次の如くになります。

信徒一五二六名中

男子 二七・三六% 女子 七二・六四%

靈友會に入會(入信)した年令(女子のみ)

二〇歳未満	三・九%
二〇—二五歳	一〇・四四%
二五—三〇歳	一〇・七六%
三〇—三五歳	一〇・七三%
三五—四〇歳	一五・八二%
四〇—四五歳	一二・〇三%
四五—五〇歳	一三・六一%
五〇—五五歳	一二・九七%

二〇歳から三五歳までに入信したものが平均一一%弱なのに對して、三五—四〇歳が一五・八二%、それ以後が平均一二・五%となつて中年層が最高率を示しています。職業別でみますと、

職業別信徒數(調査人數二一四〇)

無職	四一・六二%
農業	二八・一八%
商人	一一・一八%
會社員	五・〇八%
官吏	二・八五%
鐵道員	一・五七%
學生	一・三一%
外に醫師二人 會社社長一人	

となつており、無職の多いのは、家庭婦人が大多數である

證據です。このように中年主婦が多いというのは、この人々が暗示と模倣という心理作用を適用するのに最も適しているからであります。主婦の家庭に於ける地位は一應中心的であり、特に中年になれば経済的きりまわしとか、子供の成長による時間的餘裕とかの條件が加わり、特に、家族の内に病人が出た場合などには、男子の主導權を完全に扶殺する立場に立ちます。而も心理・生理的には更年期的狀態によつて、ヒステリーを武器とする獨裁性も獲得します。他方、一般的適性として、女性特有の被暗示性と模倣とを持つています。従つて、家にいてたまたま信仰勸誘に來た者にまづ第一に接觸するのも、それ以後頻繁な交渉を持つのも中年家庭婦人であり、その被暗示性の故に相手のいうことを無批判にのみ込み、のみ込んでしまうと、女性特有のねばり強さと模倣性で家族員の同化にとりかかります。家族の同化が終れば、その教えの強制に従つて、家庭外の親類・知己・近隣へと手をのぼし、更に新しい同質の相手に、自分が受けたと同様の手段を以つて臨むようになります。時間的にも、知性的にも、地位的にも、中年女性には男性や同性の若・老年者にはみられない、上に述べたような諸傾向を持つており、従つて、此等の點を逆に利用すれば、會員獲得・教勢擴張の上に絶對有利であることは言うまでもありません。中年女子を把握するもう一つの利點は、彼女等の持つ見榮を利用し、競争心をあふり立てること、本部に於ける集會での毎月の成績報告や、支部や法座での發言などにこれを利用し、お導きや教團への寄附

金などを無限大に増加し得ます。競争の行きすぎから、會員の奪い合いにまで發展することは屢々耳にするところでもあります。

暗示作用のも一つの利點は、九十九のはずれを黙つていて、たつた一つのあたりを強調することによりまして、百發百中の印象を與えることであります。これは丁度競輪やパチンコの心理と同じで、當つたことだけを吹張して、當らぬ時は黙つていると、いつも當つているように思われまゝす。また自分自身も一生懸命にそのことを吹張している内に、自己暗示にかかつて、やれば必ず當るように錯覺します。而も此場合にも新興教團にはちやんと逃げ路が出來ていて、病氣がなおらなかつたり、豫言がはずれたりするとそれは當人の信仰が足りないからだ。もつと一生懸命に本部参りをしたり、おみちびきをしなければいけないと、逆に當人の責任に歸してしまします。こゝにも被暗示性が働いて、そんなものかとばかり一層熱心になります。而もこの一當つた、當つた一と誇大に宣傳する役目を引うけるのが、ひまと餘裕と口のおくまわる中年主婦ということになります。

b 斷定と決斷

これは前項の暗示と關係のあることでありますが、新興宗教には選擇ということは許るされません。中道とか中庸とかトレランス(寛容)なんという、常識的判定は用いられません。是非善惡に拘らず、すべて明確な斷定と、そし

てまた斯る斷定に服従する決斷が要求されます。「お腹の病氣にかかるのは腹悪くて強情だからだ」とか「脚の病氣にかかるのは若い頃親を邪けんにして、親の肩に足をのせるようなことをしたからだ」「此の家に病人の絶えないのは、此家の無縁佛が祟つてゐるからだ」と、すべての原因を速斷します。大體、新興教團を訪れるものは、すべて何等かの悩みか病氣を持つていて、身心共に健全な者は皆無であります。みな迷つた舉句に行くのであるし、行くにしても人にすすめられて、「あの教えはとてもよいから一度行つて御覽」といわれて、好い先入主を持つて行くのでありますから、既にそこには被暗示性の素地が出来上つています。そこでびしつと斷定されますと一ぺんで「ははあ」と感心してしまいます。而もその斷定には、必らずこれに従うべしという命令に對する決斷が附隨しています。原因（超自然的）に對する斷定に止まるなら、それは易者の領域にすぎません。ところが新興教團では「そうだからこうしなさい」と命令します。而もその命令の裏には、恐ろしい罰がかくされています。先頃新聞紙上を賑わしたように「此子の名前をかえないと三年以内に死ぬ」という具合の逆の場を暗示することによつて、服従の決斷をせまるのであります。人間誰しも弱みを持ち、盲點をそなえてゐるのでありますから、そこを衝かれれば大抵のものはこれに従服してしまいます。

パスカルの賭にしても、キエルケゴールの深淵への飛躍にしても、すべて宗教には「決斷」が不可欠とされますが、

眞實の宗教では、純粹に主體の側の決斷であるのに對して、新興宗教の場合には、それが與えられた、而も極めて不合理な理論のもとに強要されます「強いられた決斷」であつて、そこには比較を絶した本質的相違が存在します。

c 結果の現實性

決斷を要求する場合の手段に用いられる色々の行爲から生れた、色々の結果はすべて現實と結びつけられます。ひろく宗教一般に於きましても、行動の責任という意味での因果應報が説かれますが、それは象徴的な意味で而も善・惡兩面にわたり、三世（過去・現在・未來）に通ずるものとされます。これに反して、新興宗教に於いては、凡ゆる行爲の結果が、現實に、迷える當事者個人の上に集中して來ます。而もそれは悪い結果のみでありまして、これを未來に伸展することが許されません。過去・現在の二世のみであります。たまたま、偶然引越して住みついた家で、その前に住んでいた見も知らぬ人間が残として行つたむくいまで引かぶされるのであります。因縁は行爲に即するもので、場所とか物にまわりつくべきではないのであります。が、此點が無視されます。またそれが不特定個人に背負わされて、原因と結果の間に何等の必然性がみられません。何も知らぬ後住者に祟つたり、罪の無い子供を病氣にしたります。更に亦既成教團の如く來世とか天國とかといったことを説きません。せいぜい説いて世界救世教の地上天国ぐらいであります。従つてすべては現實生活に集約され

その解決はあくまでも現實的手段を以つて行われ、そこに倫理性というものが缺けています。

社會的變動期に生活する現代人の大部分にとりましては、來世とか天國とかといったものの正しい宗教的意味は理解しにくいのであります。結果を來世に待つといった、形而上的な思惟の世界は新興宗教では否定してしまい、すべてが目の前に、形をとつて現われて來るものとして説明して行くところに、現代人の心理をキャッチした世界觀の一つが現われて來るのであります。

d 個人的・社會的缺陷の指摘

最後に個人・社會を問わすその缺陷を衝きその弱點を逆用します。

人間誰しも缺點を持つており、自分でも漠然とながらそれを意識しています。而も大體の性向はその人の表情・言動を通じて判斷することが出來ます。更にその判斷を確かならしめるために「告白」をやらせます。「信仰告白」は新興宗教が最も多く用いる入門手段であります。おどる宗教では「ともみがき」として一緒の教義實踐とさえしています。これをやらしめおいて大體の性癖を掴み、端的明快にその缺點を指摘します。その指摘の仕方も強情・欲張り・わがまま・傲慢・陰氣といった、人間である以上誰でも多少は持つてゐる性癖を大ざっぱに指摘します。ところが指摘された者としては暗示的にそれが妙に大きく感じられて、自分自身がいかにもそうだったように感じてしまいま

す。而も、告白によつて今まで胸の中にもややつかえていたものを全部吐き出した後なので、一層その暗示が新鮮なものとして強く作用するのであります。信仰心理の特質として、初信は動かしがたい保守性を持つていますので、冒頭でころりと信じさせてしまえば、後は少々矛盾したり誤つていたりしても、これに氣付かず盲信して行くものなのであります。而も、その斷定の仕方、缺點の指摘の仕方が強壓的であればある程、初信の強度が増して來ます。個人的缺陷に次いで、社會的缺陷として多く指摘されるのは家庭の不和・仲間争い・社會制度の不備等であります。家庭不和の最大は嫁姑・夫婦・親子・兄弟等のいさかいに關するもので、これは近代日本社會の家族制度の變換期として、當然起るべき現象であるのを、すべて宗教的原因に結びつけてその決斷を迫るのであります。社會制度の缺陷としては、失業保障・救済制度等の不完全、醫療保護の不備等から結果するものでありますが、これをもまた宗教的手段によりまして「教えを信すれば必ず就職出來る」とか「失業を免れるには信仰しなさい」といふます。これ等の缺陷は無論政治的・社會的・經濟的原因によるものであるのを、すべて個人の信仰態度に還源してしまいます。宗教本來の目的は斯る缺陷の本源的解消にあるべきであります。新興宗教では逆に此等の缺陷を強調し、擴大し、それを手段的に使用することによつて、缺陷を解消せしめるのではなくして、關心を他方にそらすことによつて轉化せしめてゐるのであります。小口東大助教授のいうように、此

様な社會的缺陷を新興宗教のように個人の上に轉化せしめることなしに、社會的視野のもとにそれ自體として解決する方向に進むとき、始めて新興宗教は歴史的・社會的試練に耐えて存続し得る道を發見するのでありましよう。

むすび

大變ながい間、愚見をくりひろげて、讀者の皆様にご迷惑をおかけしました。が、今回も以つて、一應終りと致します。最近、立正交正會が讀賣新聞で扱われています。始めのうちは刑法上の問題だつたのが、近頃では、大分、内容的な信仰の是非という點にまでふれて参つておりますが、從來、この種の問題がうやむやにされがちだつたのを省みて、或程度嚴密に批判することは、正しい信仰の上からも必要と思ひます。皆様方も、充分御注目下さいまして、新興教團の現實の姿を見きわめ下さらんことをのぞみます。

(一九五六・五・二) (大正大學教授)

紹介



成田氏の「黒い旅路」にちなんで

近頃、文藝の世界では「太陽族」だの「太陽ブーム」だのという言葉がはやり出して來た。石原慎太郎の「太陽の季節」が一ヶ月半で十二萬部賣れたところから出た言葉である。ところで、最近の文壇では「新人」を作り上げるのに、丁度、映畫スターを仕立てるのと同じような方法が用いらるそうである。特異な性格と才能を持ったものを、いち早く見つけて「これで行こう」とメドをつけると、無茶苦茶な宣傳をして、大衆を錯覺におとしつけてしまふ。そういう意味で、近來の人氣作家というものは、自分自身に餘程の才能と努力がなければ、花火のように空中に散つてしまふ。例の「地上」を書いて一躍寵兒となつた島田清次郎の往死がこれを物語る。

ては、戦争ようやく苛烈になりつゝあつたころ、ガランとした大正大學の宗教學研究室で、共に語り、共に學んだ忘れぬ人である。その後、一時、君の消息は學問の社會から遠のいて、やがて、文藝の社會に、その異常なエネルギーをもつて進出しているときいていた。それが、今日、突如として(無論御本人にとつては、うまずたゆまぬの努力の連續であつたらうが)その名を初號活字で一流誌に飾つたのである。

私共はかつては一瀬直行氏を、そして近來では武田泰淳氏を文壇に仰いだが、今日はまた成田氏が「黒い旅路」を以つて、第一線に進出されたことを、何にもまして喜びたい。

(竹中信常)

こういつた、華々しい振手な面で人目を引く文壇にも、矢張り、その反面、ちつくりと腰をおちつけて、一步一步とその地歩を着實にすすめて行く「實力派」がいる。特に、最近、オール讀物六月號の第八回オール新人杯にトップとなつた寺内大吉を私共は異常な關心をもつて見守りたい。

寺内大吉——成田有恒君は人も知る、東京世田谷の大吉寺の御住職、というよりは、小生にとつ

浄土シリーズ

大野法道著

五重の話

- ★……四頁一部二圓、……☆
- ☆……百部以上一、八……★
- ★……圓、三百部以上……☆
- ☆……一、五圓 送料……★
- ★……五十部毎八圓 ……☆

本宗入門の式である大切な五重とは何にか、何を傳へどんないみがあるのか、大野博士が特に平易に解説されたもの。

法然上人鑽仰會發行

後記

○初夏の薰風は心爽やかな快感をあたえる。野や山の眼に泌みる青葉若葉の間から若人の歌どえがひびいてくる。すべての生あるものに躍動を感じるのが今頃の季節であらう。

○しかし編輯子のこゝろは暗く限りなく寂しい。「山寺の春」が吉田先生の遺稿となろうとは。七十年の生涯を淡々と歩まれた先生の道跡は美しく、大きい。憂きことにおののく世の人々のこゝろにいつも清らかな温情に充ちたはげみと秘めたる力を與えられた。それは又、何より先生自身の孤獨な不自由な生活を支えたちからともいえよう。

○吉田先生の靈前には、本誌編輯部より生花が供せられ、佐藤賢順、竹中兩先生に水谷君が焼香に参列された。其の後七日毎に佐藤先生が御回向に伺つて居られる。

○會員の北海道の須藤隆仙師、今度森稱名寺に住職された由。若き有能の師の發展を祈つて止まない。

○六月初旬名古屋に於て浄土教學大會が開かれ、本誌關係の諸先生

が大舉東くたりとの事。その爲か書齋に閉じ込もり研鑽に餘念なき先生方が多い。

○その事は、別に本誌發行の遅延と關係はない。今更云譯けは申しませんが只我行精進をお誓いするのみです。(宮林)

○兎角、混迷期には人の心まで混迷する。目先がチラ／＼するもの無理ないが現實はもつときびしい。じつくり現實を眺めたいもの「送る羊」が如何に多いことか、本誌を以つて終りました竹中先生の「新興宗教讀本」はその意味でもう一度通して讀んでいただけたら。

○四月號後記で本月は五重特集と申し上げましたが、六月號との感違ひ、どこかの放送局の開局當時ではありませんが訂正させていただきます。

○編輯子も末筆ながら、吉田絃二郎先生の御冥福を祈らせていただきます。原稿を載きに上つて歸り、御不自由な足で玄關までお送りいただき、門を出るまで立つておられた、その御姿。病院での御姿。先生の遺稿を拜見しているとそれらが重なり合つて、腦裏をはなれない。

合掌

(水谷)

會費(誌代)

半年二〇〇圓・一年四〇〇圓です。前金切の節は、精算通知を致しますから、折返し御送金下さい。御送金は便利で安全確實な振替を利用して下さい、千圓まで二五圓の手数料で且、通信も書けます。新しい市は必ず縣名を、又、新規か繼續會員かを明記して下さい。

「浄土」五月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和三十一年四月廿五日印刷
昭和三十一年五月一日發行

(定價三十圓)

編輯人 竹中 信 常

發行人 佐藤 密 雄

印刷人 春山治部左衛門

印刷所 共立社印刷所

東京都品川区上大崎一ノ七八二

發行所 法然上人鑽仰會

振替 東京八二一八七番

特價奉仕

一、寺院用佛具類一式

一、在家用佛壇、佛具一式

多少に拘わらず御用命或は御紹介下さい

東京都江東區深川三好町一ノ五長專院不動寺脇

區役所前

正本堂佛具店

電話深川(64)五八四八

團體宿御案内

一、當寺本堂庫裡再建完了しましたので五十名位までの團體宿泊を實費で引受ます。

東京都江東區深川三好町一ノ五區役所前

長專院不動寺

正 本 實 業
電話深川(64)五八四八

幼稚園 保育園 運動遊具

全國幼稚園・保育園・小學校・各團體に、良品を廉價にの
ットで、堅牢安全な遊具を納入、好評を頂いております。松
答・光明・芝・明照等の浄土宗幼稚園採用。



篠澤鐵工所

東京都大田區堤方町718
電(75)1024(池上驛東3分)

鎖ブランコ2人乗	¥ 13,000
鎖ブランコ3人乗	¥ 15,000
鎖ブランコ4人乗	¥ 22,000
鎖ブランコ6人乗	¥ 26,000
椅子ブランコ4人掛	¥ 13,500
太鼓橋	¥ 10,000
ジャングルジム中型	¥ 28,000
單式滑臺中型	¥ 23,000
復式滑臺中型	¥ 36,500
動物付き遊動木	¥ 30,000

此他各種、一報カタログ送

配達實費(都内横濱500圓以内
其他1000圓以内)組立無料。

小田原・熊谷・土浦以遠は丸通
送り、(荷造費當社・送料着拂)

組立説明書送付